祖国へ帰れぬ朝鮮人遺骨

従軍の2331柱

いまだ厚生省に

からむ複雑な外交

太平洋戦争に日本軍人、軍属として従軍、戦死した朝鮮人の遺骨二千三百三十一体が、今なお引取り手もなく、厚生省の霊安室に置かれたままになっている。同省援護局では「日本人の場合と同様、一日も早く遺族にお渡ししたい」というのだが、遺族確認の方法がないことや、引渡し方法によっては複雑な外交問題になるおそれがあることなどから、これら英霊の安息の地はみつかりそうにない。

厚生省援護局の調べによると、太平洋戦争には日本統治下の朝鮮人二十四万二千三百四十一人が軍人、軍属として参加、うち二万二千百八十二人が戦没し、二十二万百五十九人が復員した。これら戦没者の遺骨は、終戦後の引揚げの際、戦友の手で持帰られ、うち七千五百体だけは、さる二十三年五月までに連合軍のあっせんで韓国政府を通じ遺族のもとにおくられた。

ところが、この時までに遺族に送還されなかった分と、その後日本に持帰られた遺骨計二千三百三十一体は、朝鮮動乱、日韓間に国交がない、などのことから送還がストップ、厚生省はとりあえずの措置として、これら遺骨を同省内の霊安室に安置することにした。

しかし、せっかく氏名、出身地までわかっている遺骨を、いつまでも預かっておくわけにはいかず、出来れば韓国政府を通じて遺族に渡したい、と同省はさる三十[illegible]年、三十九年、昨年と三回にわたり、外務省を通じ韓国政府に遺骨のリストを渡し、遺族調査と遺骨の引取りを申入れた。しかし、はかばかしい回答がなく、遺骨は戦後二十二年になるという現在なお、霊安室に安置されたままとなっている。

遺骨引取りについて韓国政府側が積極的でない理由は、はっきりしないが、厚生省の担当者は①朝鮮動乱などで遺族の消息がつかみにくくなっている②韓国の対日感情は必ずしも全面的に好転しているわけではない。従って日本統治下、戦争中という特殊条件下だったとはいえ、一種の"対日協力者"ともいえるこれら戦没者の遺骨引取りには、遺族自身のためらいもあるのではないか③遺骨に対する国民感情の違い——などの点をあげている。

もっとも最近になって、韓国政府から厚生省に「遺骨全部を一括して渡すなら引取ってもよい」という非公[illegible]意思表示があったという。

しかし、日本側として、これらの遺骨のうち五百四体は北朝鮮出身者のものであり、韓国政府がどのような方法で北朝鮮在住遺族に遺骨を送るか明確でないこと、もし韓国側に引渡した後、北朝鮮側から引渡し要求があれば面倒な事態になる、という点から、簡単には応じられない事情がある。

厚生省としては、折りを見て韓国側と遺族調査促進の話合いを進めたい意向だが、これらの複雑な事情からみて、遺骨が故国に帰る日はかなり先のことになりそうな見通しだ。

5/2 朝日（夕）